中世土師器研究ノート (2)

―― 朝日西遺跡の様相 ――

佐　藤　公　保

1．はじめに

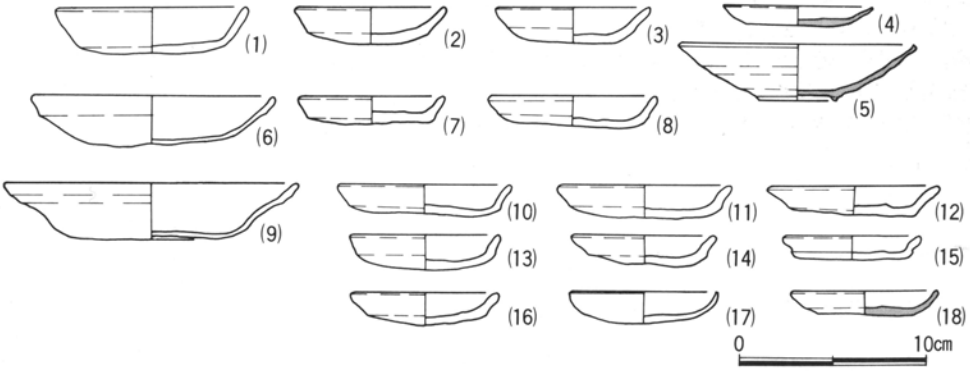
前稿[1]では、朝日西遺跡の11世紀後半から14世紀中葉までの皿を中心とする土師器（供膳形態）について検討を試みた。今回は14世紀後半から、朝日西遺跡でⅡ期[2]とする17世紀初頭までの溝を中心とした遺構出土の供膳形態の土師器皿を検討していきたい。

2．非ロクロ成形の土師器皿を出土する遺構及び供伴遺物

前稿で口縁部外面に幅狭のナデを施し、椀に近い形態を取る土師器皿をC類とし、その出現をⅢ期とした。供伴遺物及び土師器皿の形態、調整等から、Ⅲ期に続く土師器皿を出土する遺構には、ＳＥ07、ＳＫ11(共に朝日西遺跡59年Ｂ区、以下59Ｂと略する。)、SD02(59D)がある。

ＳＥ07(59Ｂ)は、内部構造物に曲物をもつ井戸である[3]。出土遺物(第１図(1)～(5))は、美濃系の灰釉系陶器椀、皿にB_1、B_2類の土師器皿が伴う。灰釉系陶器椀は、その特長より14世紀後半に比定できる[4]。B_1類の土師器皿(第１図(1))は、口径10cmを測り、Ⅲ期のB_1d類よりさらに口径が縮小する。また、口縁部に一枚の粘土帯を重ね、接合した痕を残す。

ＳＫ11(59Ｂ)は、出土遺物が少なく土師器皿しか見られない性格不明の土坑である。(第１図(6)～(8)) (6)は、Ｃ類に範疇に入り、口縁部外面に幅狭のナデを施し、ナデの幅だけ口縁部は肥大する。器壁は薄い。



第１図　ＳＥ07、ＳＫ11(共に59Ｂ)　SD02(59D)　出土遺物
(1)～(5) ＳＥ07(59Ｂ)　(6)～(8) ＳＫ11(59Ｂ)　(9)～(18) SD02(59D)

ＳＤ02(59Ｄ)は、ほぼ南北に走り、後述するＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)に切られる溝である。図示(第１図(9)～(18))した遺物の他、陶器類として、古瀬戸と言われる施釉陶器、灰釉系陶器が見られるが、いずれも小片であり、図示できたのは(18)の灰釉系陶器皿のみである。(9)～(17)は土師器皿である。(9)は、体部が屈曲して外反する。口縁部外面に二段の幅狭のナデを施す。器壁が薄く、大型の皿である。Ｃ類の範疇に入る。(10)～(16)は、B_2・B_3類に入り、Ⅲ期のB_2・B_3類に比べて、口縁部が外反する傾向が強くなる。(17)は、底部から口縁部にかけ内弯する小皿である。外面は全面、無調整、内面は摩滅が著しく調整は不明である。Ⅲ期以前には、見られない皿である。

３．ロクロ成形の土師器皿の再出現

B_1～B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿しか見られなかったＳＤ02(59Ｄ)に対して、を切るＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)では、B_2、B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿とロクロ成形の土師器皿の混在が見られる。

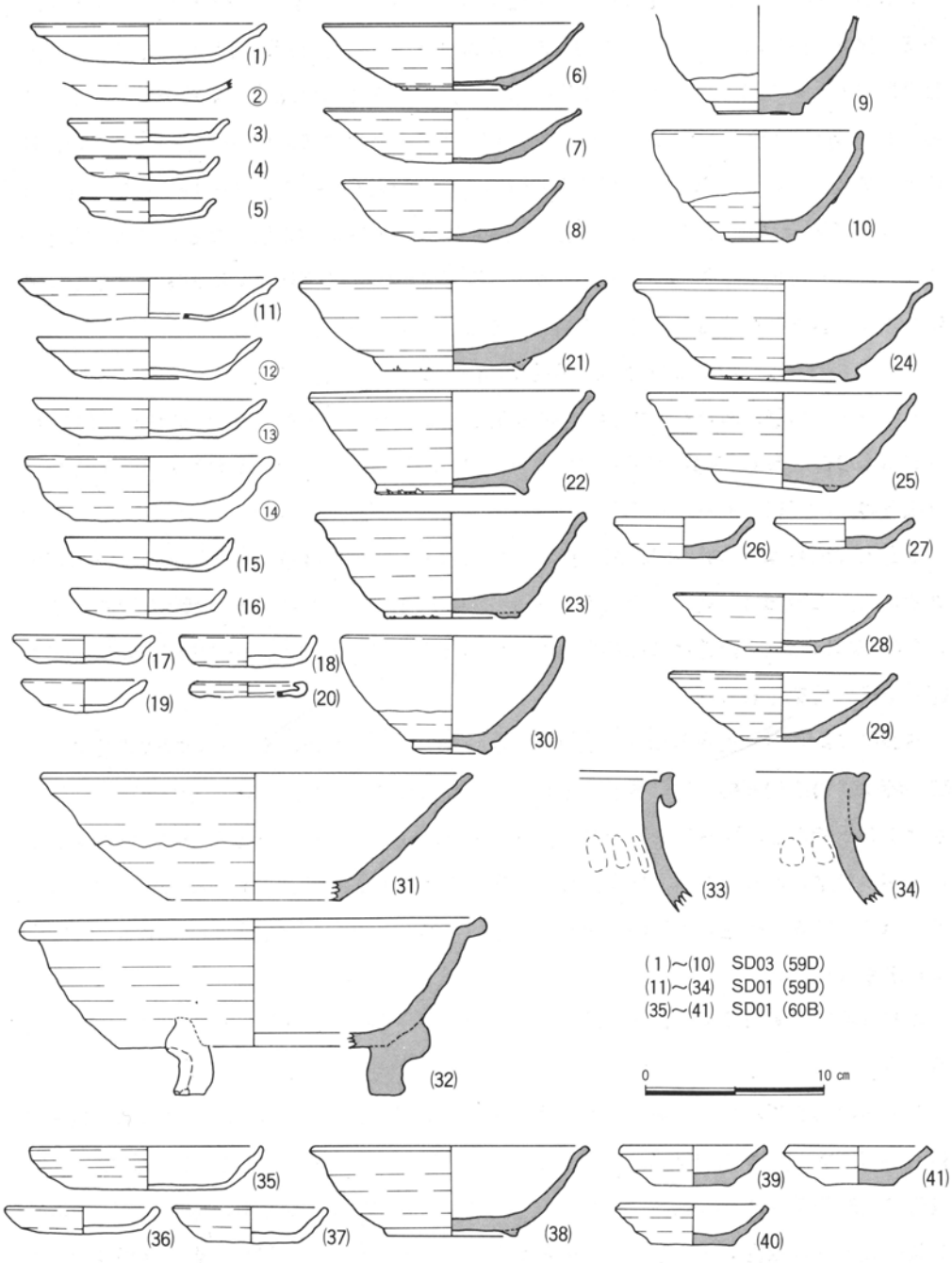
ＳＤ01(59Ｄ)は、ＳＤ02(59Ｄ)に直交し東西に走り、上層は整地を受ける幅５ｍほどの溝である。この溝は、前述したようにＳＤ02(59Ｄ)を切ると共に、ＳＥ01(60Ｂ)を切る。ＳＥ01(60Ｂ)は内部構造物に曲物をもつ井戸であり、出土遺物(第２図(31)～(40))から、13世紀前半代に比定できる。

ＳＤ01(59Ｄ)の出土陶器類は、上層が整地を受けているため、かなりの時代幅をもつ。(21)～(29)は灰釉系陶器椀・皿であり、それらの特長により11世紀後半から15世紀後半に比定されるものである。(30)～(32)は、所謂、古瀬戸と呼ばれる施釉陶器であり、古瀬戸の中期から後期に比定される。(33)、(34)は常滑産の大甕の口縁である。(33)はＮ字状口縁を呈するもので、(34)は、口縁の折返しが体部に密着するものであり、(33)は14世紀後半に、(34)は15世紀末に比定される[6]。

これらの出土陶器類より、ＳＤ01(59Ｄ)は少なくとも15世紀末には整地を受けたと考えられる。

これらの陶器類と共に、整地層中より(11)～(20)の土師器皿が見られる。(11)はＣ類、(15)～(19)はB_2・B_3類、(20)はB_4類の非ロクロ成形の土師器皿である。それに対して⑫～⑭はロクロ成形の土師器皿である。その中で⑭は、形態、胎土等よりA_1類の土師器皿であり、A_1類は11世紀後半から12世紀後半までしか見られないことを考えると、整地を受けた15世紀後半代のものとは考えにくい。⑫、⑬は、底部に回転糸切り痕を残す。体部は直線的に開き、口縁部外面がナデの幅の分やや肥大する。見込み、体部内外面は、ナデ調整をうける。器壁が非常に薄い。A_1類とは別系統のものと考えたい。

同じく、ＳＤ02(59Ｄ)を切るＳＤ03(59Ｄ)でもＣ類等の非ロクロ成形の土師器皿とロク



第２図　SD03、SD01（共に59D）　SE01(60B)　出土遺物

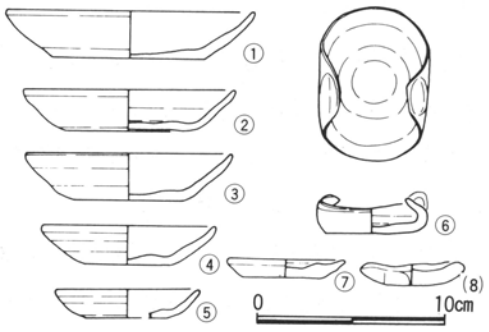
ロ成形の土師器皿の混在が見られる。このＳＤ03(59Ｄ)は、ＳＤ02(59Ｄ)と近接してほぼ平行に南北へ走り、ＳＤ01(59Ｄ)の手前でとぎれる。ＳＤ01(59Ｄ)同様、上層は整地をうける。出土遺物は、第２図(1)～(10)である。(6)～(8)は美濃系の灰釉系陶器椀である。高台の有無等の特長より、14世紀後半から15世紀後半に比定できる(7)。(9)、(10)は、所謂、古瀬戸の天目茶椀と言われる鉄釉の椀であり、いづれも古瀬戸の後期に入る(8)。土師器皿は、(1)～(5)である。非ロクロ成形のものとして、(1)はＣ類、(3)～(5)はB_3類に入る。これらと共に、②は底部のみであるが、器壁が薄く底面に明確に回転糸切り痕を残すものが見られる。

このようにＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)では、12世紀後半から15世紀末の陶器類と共に、B_2・B_3、Ｃ類の非ロクロ成形の土師器皿とロクロ成形の土師器皿とが見られた。前稿でもふれたように朝日西遺跡において13世紀から14世紀中葉までは、非ロクロ成形の土師器皿しか見られない。また、前にも述べた様に、第２図②、⑫、⑬の土師器皿は、11世紀後半から12世紀後半代まで見られたA_1類とする土師器皿とは、形態、胎土等がまったく異なる。この２つのことから、A_1類と別系統のロクロ成形の土師器皿が少なくとも15世紀末には出現していたと考えられる。

さて、ＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)が整地をうけた15世紀末以降、朝日西遺跡では一時期、遺構が非常に希薄になる。そして、約半世紀後の16世紀後半代になると、朝日西遺跡は清洲城下の外堀近く北東の一画として、遺跡全面に遺構が展開するようになる。

その中でまとまった土師器皿を出土しているのは、ＳＤ11(59C･D)である。

ＳＤ11(59C･D)は、南北に走り、屋敷地を画する溝である。前年度の愛知県埋蔵文化財センター『年報』で、遠藤才文、小澤一弘両氏が紹介している通り、溝内からは多量の陶磁器類と共に、木製品、人・獣骨類が出土した。出土陶磁器類には、鉄釉天目茶椀、長石釉天目茶椀、摺鉢等の大窯後半の陶器類、中国陶磁の椀、皿が見られる。土師器としては、供膳形態の他、煮沸形態として、羽釜、内耳鍋が見られる(9)。土師器皿は、ロクロ成形のものが主体を占めており、法量で５形態にわかれる(第３図①～(8))。①は、口径13.0cm、器高2.4cmを測り、大型のもの。②、③は、口径11.0～11.2cm、器高2.2～2.4cmを測り、中型のもの。④は、口径10.0cm、器高2.0cmを測り、②、③に比べやや小さい中型のもの。⑤は、口径7.6cm、器高1.6cmを測り、小型のもの。⑦は、口径7.0cm、器高0.8cmを測り、偏平なものである。また、⑥は、⑤とほぼ同じ法量で、口縁部を内側に曲げた、所謂、



第３図　SD11(59D)　出土土師器

耳皿と呼称されるものである。①～⑦は、いずれもやや丸味をもち、直線的に開く体部をもつ。見込み、及び体部内外面には、ロクロ回転を利したナデを施し、底面には回転糸切り痕を残す。非ロクロ成形のものは、(8)のみである。口径8.8cm、器高1.2cmの偏平な皿である。粘土塊を手ひらや指腹にのせ肘で押し成形したと考えられ、外面は、指の痕を残し無調整、内面はナデを施す。

出土陶磁器類に長石釉を施したものが見られること、織部焼の製品が出土していないことから、この溝の時期を16世紀後半から17世紀初頭にかけて比定している[10]。

4．清洲城下町遺跡ＳＤ03(60Ｆ)出土の遺物

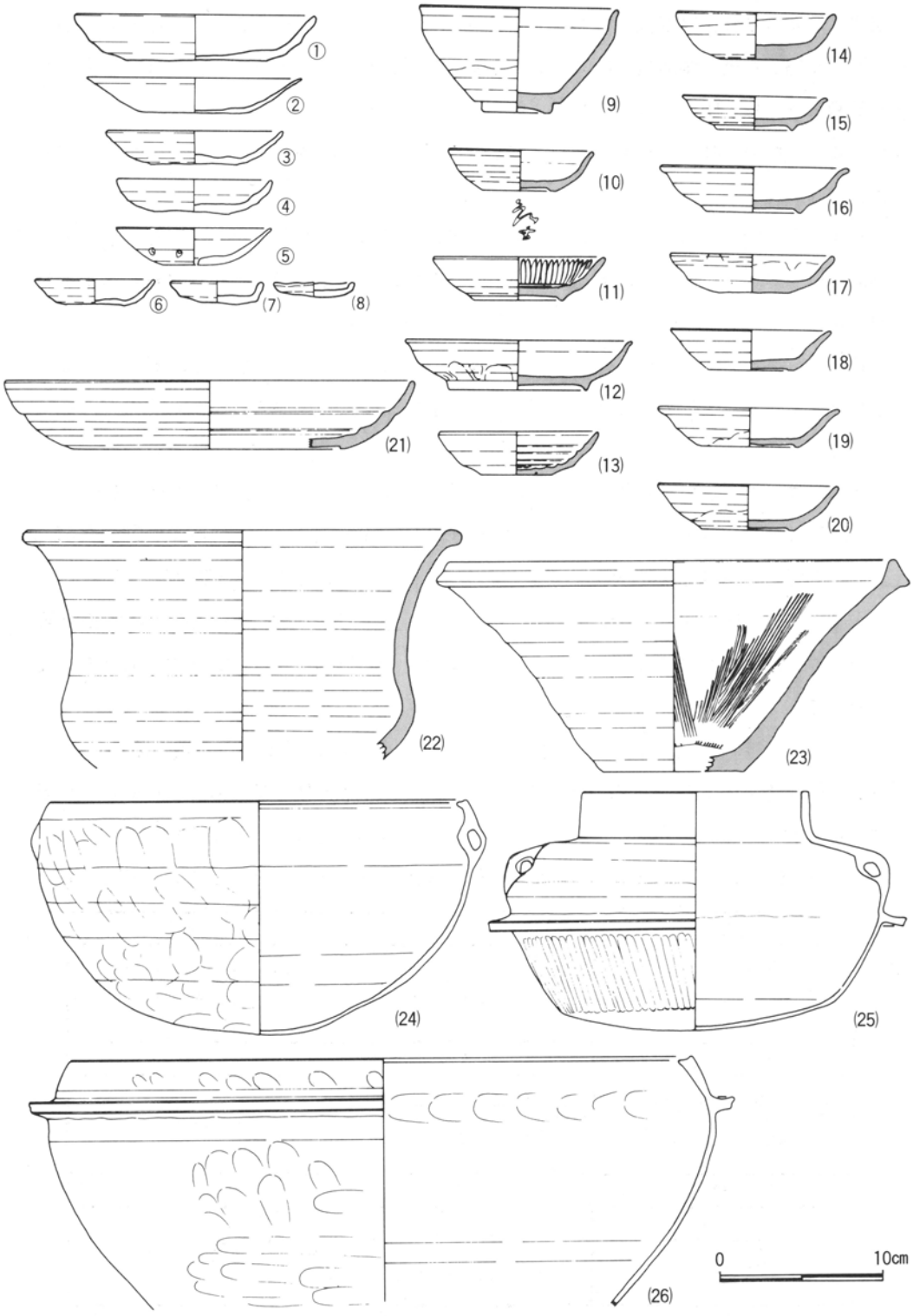
朝日西遺跡で遺構が希薄になる15世紀末から16世紀前半代の間、朝日西遺跡と五条川を挟んで対岸に位置する清洲城下町遺跡では、遺構が大規模に展開する。

その中で、ＳＤ03（清洲城下町遺跡60年Ｆ区、以下城下町60Ｆと略する。）は、清洲城下町遺跡の西端に位置する美濃街道の下を北西に走る溝で、幅約1.8m、深さ1mを測り、断面Ｕ字形を呈する。出土遺物（第4図）は、瀬戸・美濃産の椀・皿・摺鉢、常滑産の甕、中国陶磁の染付皿、鍋・皿等の土師器が見られる。瀬戸・美濃産の陶器類は、口縁部が外反する端反皿、口縁部のみ施釉される縁釉皿が見られること等から、16世紀初頭に位置づけている[11]。土師器皿（第4図①～⑧）は、ＳＤ11(59Ｄ)と同様ロクロ成形のものが主体を占める。①は体部下部に稜をもち、やや外反しながら立ち上がる。口径14.6cm、器高2.8cmを測る大型の皿である。②は、直線的にひらく体部をもち、口縁部がやや肥厚する。ＳＤ01(59Ｄ)出土の土師器皿（第2図⑫、⑬）に類似する。口径13.2cm、器高2.0cmを測る。①に比べ、やや小さい。③は、体部下部に緩い稜を有し、直線的に立ち上がる。口径10.4cm器高2.0cmを測る。④は、やや内弯する体部をもつ。口径9.6cm、器高2.0cmを測る。⑤は緩やかに立ち立がる体部をもつ。口径9.6cm、器高2.4cmで、やや器高が高い。なお、図中の⑤には、体部側面、底部に数ヶ所に穿孔が見られる。③～⑤は中型の皿である。⑥は体部下部に稜をもち、直線的に立ち上がる。口径7.2cm、器高2.0cmを測る小型の皿である。(7)、(8)は非ロクロ成形の皿である。(7)は、B_2類に入る小皿であるが、口径5.6cmと口径の縮小が著しい。調整はB_2類と同様で、外底部は無調整、体部外面はナデ、見込みは横ナデ、内面には外周に沿ったナデが施される。(8)は、口径4.8cm、器高0.8cmと低い体部をもつ。調整は(7)と同じであることから、B_2類の範疇に入ろう。

5．形態分類

次に各遺構から出土した土師器皿を分類してみたい。

Cb類－ＳＫ11(59Ｂ)、ＳＤ01～ＳＤ03（いずれも59Ｄ）で見られる非ロクロ成形の大皿（第1図(6)、(9)、第2図(1)、(11)）。体部は緩やかに立ち上がり、丸味をおびる。口縁部外面は幅



第 4 図　清洲城下町遺跡60 F　SD 03出土遺物

狭のナデが施され、縁帯状に肥大する。体部外面中位以下底部まで無調整。内面は見込みにナデを施した後、体部内面にはね上げるようなナデを施す。器壁は非常に薄い。横田洋三氏の言う「B_1・B_2タイプの白色系土師皿」に類似する(12)。

なお、前稿でC類とした土師器皿を、形態・調整等よりCb類に先行するものとしてとらえ、Ca類とする。

D類－ＳＤ02(59D)で見られる非ロクロ成形の小皿(第１図(17))。全体的に丸味をおび、体部はやや内弯しながら立ち上がる。外面は口縁部から底部まで無調整。内面の調整は不明。現在のところ、確認しうるD類はＳＤ02出土の１点のみである。

E類－ＳＤ11(59D)で見られる非ロクロ成形の小皿(第３図(8))。偏平で体部をほとんどもたない。外面は指腹の痕または手のひらの痕を残し、無調整である。内面にはナデが施される。

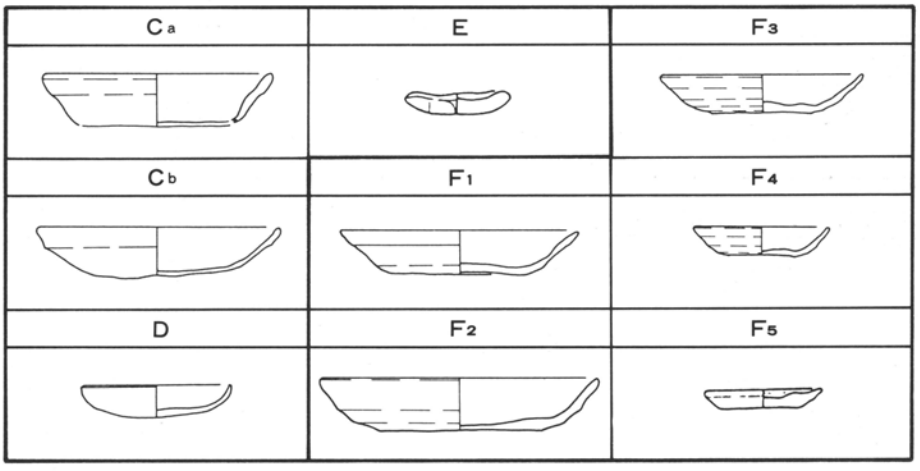
F類－ロクロ成形の土師器皿である。形態及び法量からさらにF_1～F_5に細分できる。

F_1類－ＳＤ01(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第２図⑫、⑬　第４図②)。体部は直線的に開き、口縁部がやや肥大する。口径12.6～13.2cm、底径2.4cmを測る。

F_2類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第３図①、第４図①)。体部下部に稜をもち、やや外反しながら立ち上がる。口径13.0～14.6cm、器高2.4～2.8cmを測る大型の皿である。

F_3類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる(第３図②～④、第４図③～⑤)。体部下部に陵をもつもの、直線的に立ち上がるもの、やや内弯して立ち上がるものと形態的に細分できうる。口径9.6～11.2cm、器高2.0～2.4cmを測る中型の皿である。

F_4類－ＳＤ11(59D)、ＳＤ03(城下町59F)で見られる小型の皿である（第３図⑤、第４



第５図　形態分類（S=¼）

図⑥)。体部下部に稜をもち、直線的に立ち上がる。口径7.2～7.6cm、器高1.6～2.0を測る。

F_5類－ＳＤ11(59Ｄ)で見られる(第３図⑦)。器高0.8㎝と器高が低くく、偏平な皿である。口径7.0㎝を測る。

F_1～F_5類は、全て、底部に回転糸切り痕を残し、体部内外面、見込みにナデを施す。また、F_5類以外のF_1～F_4類のほとんどには、口縁部、体部内面に煤やタール状の炭化物が付着する。F_5類には、そうした痕跡を残すものは、まったく見られない。

６．まとめにかえて

以上、朝日西遺跡を中心として、14世紀後半から17世紀初頭の土師器皿を検討してきた。14世紀後半から17世紀初頭の時期は、土師器皿の成形、形態、組成等により、次の５期にわかれる。なお、Ⅲ$_1$期は前稿で、「B_1d類とＣ類が混在する時期」としたⅢ期に相当する(第６図)。

Ⅲ$_2$期－ＳＥ07(59Ｂ)出土の遺物を中心とする。B_1類は、口径がさらに小さくなり、口縁部に粘土帯の接合痕を残し、調整の省略化が著しい。小皿類としては、B_2類しか確認できていない。現在のところ、Ｃ類に属する土師器皿は見られないが、Ⅲ$_1$期及び後述するⅢ$_3$期でＣ類が見られることから、Ｃ類とB_1類が混在すると考えられる。共伴遺物から14世紀後半代が比定される。

Ⅲ$_3$期－ＳＫ11(59Ｂ)、ＳＤ02(59Ｄ)出土の遺物を中心とする。Cb類の大皿とB_2、B_3、Ｄ類の小皿の組成からなる。B_2、B_3類の小皿は、口縁部の外反が著しくなる。また、Ca類に比べCb類は口縁部外面のナデの幅がせまくなる。現在のところ、B_1類は見られない。

Ⅳ$_1$期－ロクロ成形の土師器皿が再出現する時期である。Cb、B_2、B_3類の非ロクロ成形の土師器皿と混在する。ＳＤ01、ＳＤ03(共に59Ｄ)の遺物が中心である。大皿として、ロクロ成形のF_1類、非ロクロ成形のCb類、小皿として、B_2、B_3類が見られる。共伴遺物は、かなり時期幅をもつが、15世紀末の常滑産の大甕や15世紀中頃の瀬戸・美濃産の施釉陶器が見られること、14世紀後半代にはロクロ成形の土師器皿は見られないことから、ロクロ成形の土師器皿の出現は、やや時代幅をもたせ、15世紀後半代と考えたい[13]。

Ⅳ$_2$期－ロクロ成形の土師器皿が主体を占める時期である。ＳＤ03(城下町60Ｆ)の遺物が中心である。ロクロ成形の土師器皿の組成は、大型のもの２種(F_1、F_2)、中型のもの3種(F_3)、小型のもの(F_4)からなる。非ロクロ成形の土師器皿は、B_2類が法量的に縮小化したものが見られる。中には、体部の立ち上がりがほとんど見られないものが見られ、成形、調整の省略化がうかがえる。共伴遺物より16世紀前半代が比定できる。

Ⅳ$_3$期　ＳＤ11(59Ｄ)の遺物が中心である。ロクロ成形の土師器皿の組成は、大型のもの１種(F_2)、中型のもの２種(F_3)、小型のもの２種(F_4・F_5)からなる。Ⅳ$_2$期の大型の

ものに比べ、大型の土師器皿は口径がやや減少し、新たにF5類が出現する(14)。非ロクロ成形の土師器皿は、Ⅳ2期のB2類の成形、調整がさらに省略されたE類が出現する。共伴遺物から16世紀後半から17世紀初頭に比定できる。

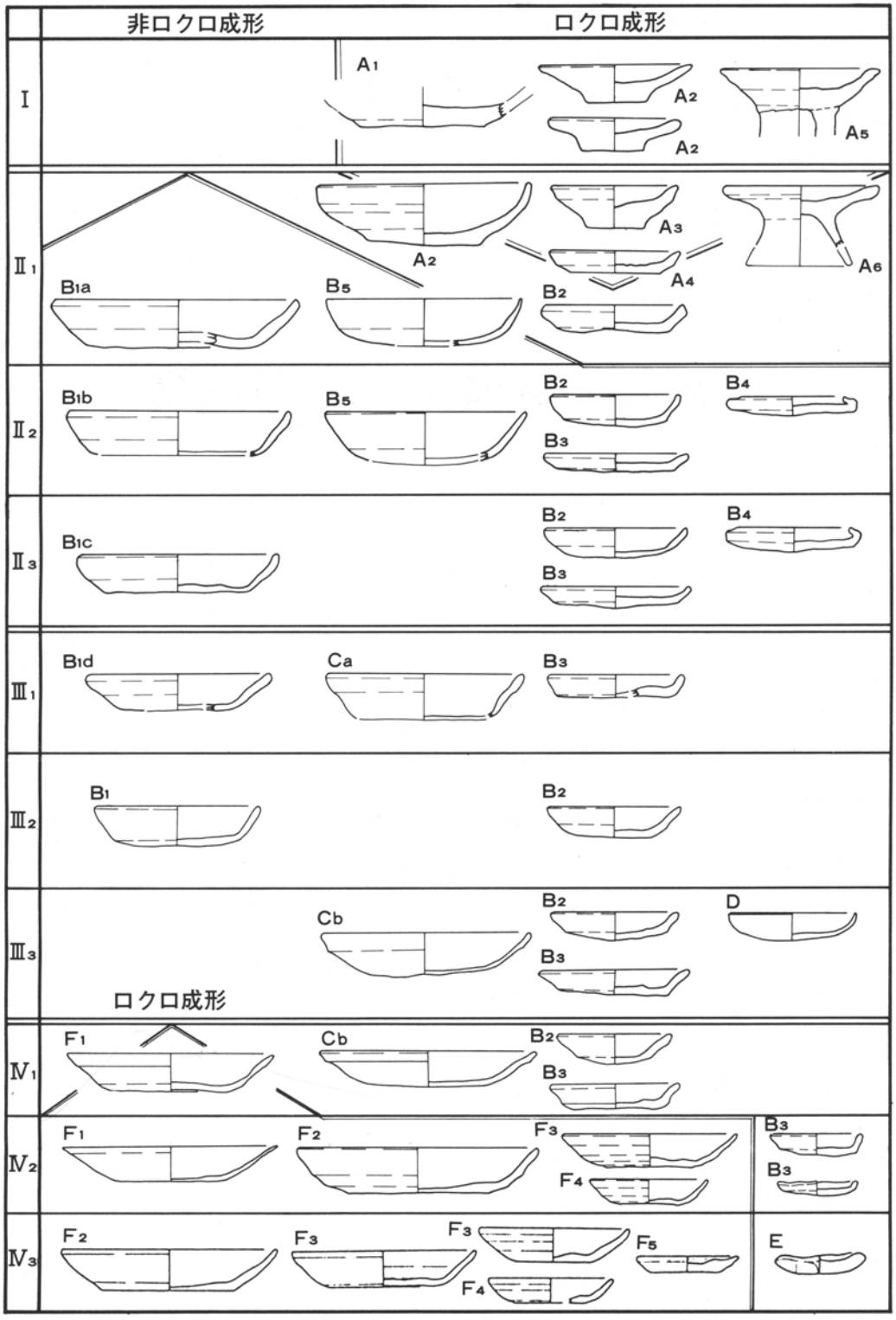
なお、Ⅲ3期は、共伴遺物からは時期が比定できないが、Ⅲ2期が14世紀後半代に、Ⅳ1期が15世紀後半代に比定できることから、その間をうめる15世紀前半代と考えたい。

Ⅲ1期からⅣ1期にかけては、前述したように、朝日西遺跡では遺構が希薄なため、同時期の土師器皿の組成を網羅したと言えない。今後、周辺の遺跡の資料の対比と資料の増加をまたねばならない。しかし、いずれにせよ、12世紀後半以降、主流を占めていた非ロクロ成形の土師器皿は、15世紀後半代以降には、ロクロ成形の土師器皿へ転換していく傾向がある。非ロクロ成形の土師器皿を京都の土師器皿の影響を受けたものととらえるならば、ロクロ成形の土師器皿は、近年窯体内でロクロ成形の土師器皿の焼成が確認されていることから(15)、窯業地の影響を受けて成立した在地の土師器として考えられる。またこうしたロクロ成形の在地土師器が非ロクロ成形の土師器を駆逐していく時期が、大窯の出現・成立期とほぼ同一時期であることは興味深い。今後、尾張を中心とする地域で、非ロクロ成形・ロクロ成形の土師器皿が、時間的に、また空間的にどのような広がりを示すかを明らかにすると共に、生産地との関係を検討しなければならない。課題は山積みされるばかりである。

本稿をまとめるにあたり、赤塚次郎、赤羽一郎、遠藤才文、小澤一弘、斎藤孝正、鈴木規子、田口昭二、立松彰、服部哲也、藤澤良祐、宮石宗弘、安田幸市の各氏の御教示と各氏の所属機関の御協力をいただいた。文末ながら記して御礼申し上げるものである。

〔注〕

(1) 佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」(『愛知県埋蔵文化財センター　年報』1985)
(2) 愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅰ」(『埋蔵文化財発掘調査年報』1984)
愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査年報』1985)
(3) 遺構の細かい検討は、本報告にゆずりたい。
(4) 田口昭二「美濃窯業史(一)　須恵器から古瀬戸系施釉陶器まで」(『美濃陶磁歴史館報Ⅰ』1981)
(5) 口縁部に粘土帯を接合した痕を残すB1類は、Ⅱ3期からすでに見られるが、B1類よりむしろ、B2、B3類で顕著である。
(6) SD01(59D)、SE01(60C)の灰釉系陶器、施釉陶器、甕については、赤羽一郎氏、宮石宗弘氏、藤澤良祐氏の御教示による。
(7) 注(4)と同じ。
(8) 藤澤良祐「〝古瀬戸〟概説」(『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』1984)
(9) 遠藤才文・小澤一弘「人・獣骨類の出土した大溝」(『愛知県埋蔵文化財センター　年報』1985)
(10) 注(9)と同じ。
(11) 小澤一弘「遺物から見た城下町　その1」(『埋蔵文化財愛知No.2』1985)
(12) 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告　第5輯　平安京左京五条三坊十五町』1981)
(13) 尾張地方でのロクロ成形の土師器皿の再出現については、「下津城跡」(『新修　稲沢市史資料編第六考古』1984)の註の中で、15世紀代を示唆している。
(14) F5類はE類と共に出土することが多く、E類と同じく体部の立ち上がりがほとんど見られないことから、Ⅳ2期のB2類、またはE類の影響により出現したと考えられる。
(15) 浅田由員「山茶碗窯出土の土師器皿について」(『愛知県陶磁資料館　研究紀要5』1986)また、田口昭二、斎藤孝正両氏によると、多治見市の尼ヶ根窯跡でも土師器焼成窯が確認、調査されている。


非ロクロ成形
ロクロ成形
I
A1
A2
A2
A5
II1
A2
A3
A4
A6
B1a
B5
B2
II2
B1b
B5
B2
B3
B4
II3
B1c
B2
B3
B4
III1
B1d
Ca
B3
III2
B1
B2
III3
Cb
B2
B3
D
ロクロ成形
IV1
F1
Cb
B2
B3
IV2
F1
F2
F3
F4
B3
B3
IV3
F2
F3
F3
F4
F5
E

第6図　変遷試案（S=¼）